

シンポジウム

まちづくり21世紀計画

どうする大館

鉱業、農林業、商業など当市の産業経済は、依然として低迷が続く深刻な事態に直面しています。市と青年会議所では、こうした現状を見つめ、二十一世紀へ飛躍する「大館市」のまちづくりをみんなで考えようとシンポジウムを開きます。地場産業の振興や地域活性化のためみんなで討論しましょう。

6割の企業が売り上げ減
国金大館支店調査
設備投資も最低水準

建設業、同和鉱業の歴史に幕
明日から新会社で出発
きょう全従業員180人が職場を離れる

景況が一段と悪化

多目的施設を明手
決め手欠く活性化策

不況下に利用膨らむ
一件当たり四百万円台に

条件緩和と相乗効果
倒産がらみの滞納も

鉱山不況で8割が影響
鉱山関係企業実態調査結果

▲新聞では連日のように地場産業の現状を伝えています。

シンポジウム まちづくり21世紀計画

と き・ 11月30日(日)
午後2時30分
ところ・ 市民文化会館中ホール

アドバイザー

- 畠山 健治郎 (大館市長)
- 三宅 淑 (秋田県中小企業振興公社理事長)
- 山本 悦郎 (山本建築設計事務所代表取締役)
- 渡部 誠一郎 (秋田魁新報社取締役論説委員長)

コーディネーター

- 清水 浩志郎 (秋田大学鉱山学部土木工学科道路工学教授)

—敬称略—

木材や鉱業を中心とした不況合理化、中・大型店などの進出による地域経済の変化、観光客の減少、農産物の輸入自由化問題……市の産業経済を取り巻く情勢は一段と厳しくなり、市の基幹産業も低迷状態が続いています。

こうした中で郷土産品の消費拡大を図ろうと、十一月一日から五日まで「郷土品まつり」が開かれ、展示発表、入場者数ともに例年以上に盛りあがりました。

市では、活力に満ちた地方中核

都市の実現に向けて、昭和六十五年を目標とした総合開発計画の後期計画を策定しました。しかしこの計画を推進するためには行政だけでは実現困難であり、官民一体となって取り組んでいかなければなりません。

そこで、市と青年会議所では、わがまちの産業、経済の現状を考え、分析し、二十一世紀に向けたまちづくりはどう取り組んでいくのかを市民みんなで考えようと、「どうする大館——まちづくり二十一世紀計画」シンポジウムを開くことになりました。

シンポジウムは、市民各層から現状や提言などを発表していただき、アドバイザーが助言するという形で進められます。そしてこれらの中から二十一世紀へむけたまちづくりを見つけ出し、行政などの施策に反映させていくものです。市民の皆さんの多数のご来場をお願いします。

市長の対話ノート



No.143

大館の地方の時代版

地方の時代といわれて久しくなりました。事実はそれに反して過疎過密が再び進み、東京圏一元化とまでいわれるようになりました。

同じような傾向は大館にもあり、市街地は昼間人口だけで夜間は空白化しています。社会経済の動向からして自然な流れかも知れませんが、地域興しという観点からすれば、自然な流れとはいってられません。

地域には、それぞれの特徴も立地条件の違いもあります。そのことを忘れて、大館という「面」だけでしか見ていないところに誤りを生んでいるのです。

私たちは、その点と面との関係を正しく把握し直し、点の振興の上での面的活性化を、しかも点における職員と市民の共同作業の中で進めたいという考えから「地域振興研究庁内プロジェクトチーム」を発足させました。

誰かに任せておけば、何とかしてくれるでしょうでは問題の解決にはなりません。進んで自分も参画し、知恵も労力も出し合い、みんなの力で自分の生活圏をよくしよう。それぞれの地域がよくなれば、結果として大館全体がよくなる、そう願って止みません。

市民の皆さんから深いご理解とご協力をお願いします。

畠山 健治郎